

⑦羽黒山御本社（現三神合祭殿）

今の羽黒山頂にある現三神合祭殿は、以前は羽黒山寂光寺（羽黒山一山の総称）の中心施設があり、御本社と称され、場所は図－1のとおり。



図－1

羽黒山の縁起については、先駆者の研究によって膨大な学術論文が販売されており、細部はそれらに譲り、出羽三山神社監修の「出羽三山史」を中心的参考として簡単に纏めた。また、写真については秘所の「秘」に相応しく通常撮影禁止のものを少し記載する。

1. 縁起

出羽三山開山の始祖蜂子皇子は、大同二（807）年靈山羽黒山の中核的存在として「羽黒山寂光寺」等十大寺を建立した。以後同皇子の遺法は後世に引き継がれ「羽黒派修験道」として興隆して来た。

2. 出羽三山の御本尊（秘仏）

同皇子は、最初に阿久谷^{あこや・あくや}で修行し羽黒山を開創し、引き続き、月山および湯殿山を開山したが、「羽黒山寂光寺（羽黒御本社）」に安置されていたご本尊は如何に！ ご本尊は「出羽三山大権現」であって、現在は正善寺黄金堂に安置されている。

現三神合祭殿は、文化二(1805)年の消失に伴う再建で、文化二(1805)年六月に内陣と呼ぶ本殿部分が完成し、文化十四(1817)年に拝殿部分も完成し、翌文政元(1818)年八月に全竣工し正遷宮――「佛教藝術」248号松崎照明寄稿文より転載――を行っている。

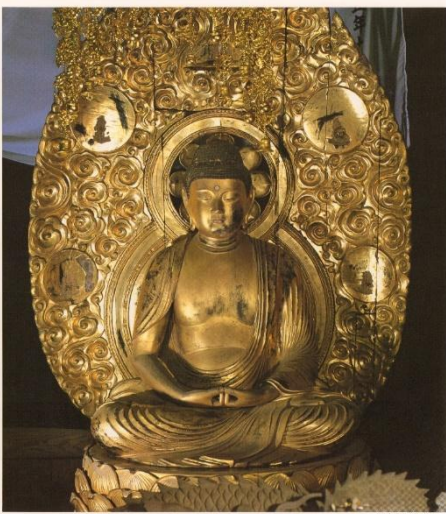
あらためて出羽三山に係る神仏習合時代の本地垂迹説による神と仏・菩薩の関係について、「羽黒山の神仏分離（いでは文化記念館）」を参考に整理すると図(表)－2のとおり。

図(表)－2				
神仏習合時代（出羽三山大権現）			神仏分離後の現在	
山名(権現)	本地仏	三世	社名	祭神（垂迹）
羽黒山 大権現	聖観世音菩薩	現世利益を適える現在の山	いでは 出羽神社	いではのかみ 伊氏波神、うかのみたまのみこと 倉稲魂命
月山 大権現	阿弥陀如来	祖霊が鎮まる過去の山	がつさん 月山神社	つきよのみこと 月読命
湯殿山 大権現	大日如来	生命の誕生を表す未来の山	湯殿山神社	おおやまづみのかみ 大山神・大己貴命・ すくなひこなのみこと 少彦名命

大権現本地仏の姿は図－3のとおりで伊藤武著「出羽三山」より拝借したものである。
正善院の祭壇にも同様の三体が祀られており、私は参拝している。



羽黒山大権現



月山大権現



湯殿山大権現

図－3

3. 羽黒山五重塔の御本尊（秘仏）

同塔に安置されていた秘仏の御本尊は、図－4のとおりで中央に中尊として正観音菩薩、向かって左に脇侍（眷属）として妙見菩薩、向かって右に脇侍（眷属）として軍荼利明王を配していた。現在は正善寺黄金堂に安置されている。なお、同図（写真は本来は撮影禁）において、右側が空いているが、軍荼利明王は神仏分離（廃仏毀釈）の混乱に紛れて盗難に遭ったものと見られているそうである。

「修験道の精神生活（内藤正敏著）」によれば、――羽黒修験においては、正観音は太陽を、妙見菩薩は北極星または北斗七星を、軍荼利明王は南十字星を神格化したものであります。つまり、中心の太陽を北極星と南十字星が北と南から守護するという構図をとっている。――と書かれている。



図－4

4. 神仏分離の悲劇

取り上げる場所は図－5aにおいて羽黒山頂は蜂子社と三神合祭殿の間から入った突き当りである。

図－5bのと通りの石碑について、前出伊藤武著「出羽三山」を参照し要約する。「建立は第75代寛弘別当――文化10(1813)年～8(1825)年――である。当初の刻銘は「南無開山能除聖者照見大菩薩」であったが、明治の神仏分離執行時に、初代宮司の西川須賀雄の揮毫した『アヒルクサモジ』に改刻されて『ハチコノミコト』に改変されてしまった。」のである。



図－5a

5. 御深秘（秘中の秘）

「佛教藝術」248号の松崎照明寄稿文より引用する。

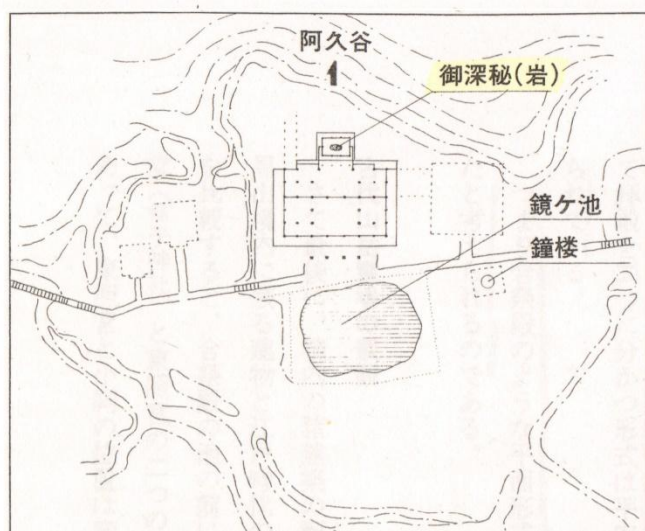
――（図－6を掲載）・・・本殿部分にある信仰対象である。^{おおみねさんじ}大峰山寺（奈良県）本堂の内々陣には、最も重要な信仰対象である「龍ノ口」と呼ばれる岩があったが、出羽三山三神合祭殿の内陣（本殿）床下にも御深秘あるいは御神秘と呼ばれる^注岩（井戸を伴う）があると伝う。この岩は本殿床下



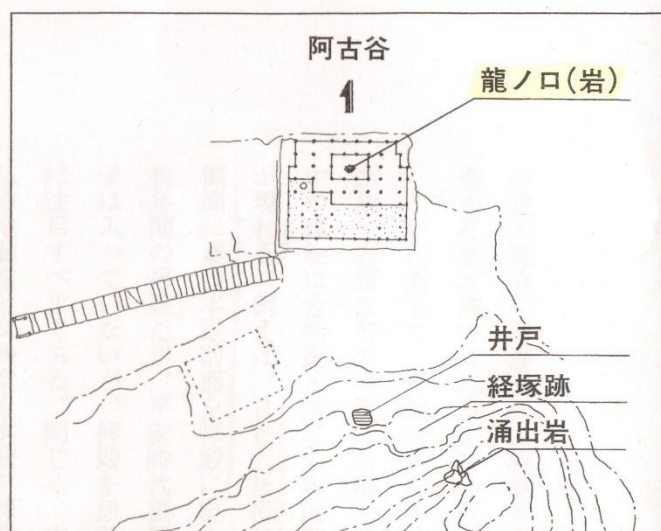
図-5b

に板塀に閉ざされており、現在も披見の許されない秘密の信仰対象で、十七年に一度、二十一日間の精進潔斎を行った神職と大工だけが修繕に入る。現社殿の前身建物が（火災で）消失した際には「^{とりあう}取敢御深秘殿乃造立」が^{くわだ}企てられ、文化十(1813)年六月には完成の届出が行われている。ここに言う御深秘殿とは、御深秘を祀る社殿という意味であろうが、文化九(1812)年二月の「会所記録」には、御本社消失のとき御深秘が人目にさらされているのは困るので、早急に囲うべきだという内容の記事があるから、古くからこの岩が元も重要な信仰対象であったと見てよからう。

（注釈）；御深秘は、重要な信仰対象であるため披見が許されないもので、その実態を知ることが出来ないが、江戸時代の修理に関する材料の記録『覚諄別當日記』を見ると、自然石をわら^{むしろ}で覆い祀っているらしい。――



羽黒山境内概略図



大峰山寺境内概略図

図-6

その1；出羽三山神社発行の「出羽三山史」には、御深秘は古例にしたがい17年ごとに造営更新を行うとある。昭和以降は昭和11(1936)、昭和28(1953)に行われたとある。その後の経過について、前頁同学芸員に尋ねたところ、近年では平成19(2007)に行ったようだが、17年が確実に守られているのか？ その前後は？ と少し曖昧であった。

その2；本シリーズ「①（羽黒山）阿久谷」に記載したとおりの出羽三山開山の始祖蜂子皇子が漂着・上陸した「八乙女の洞窟」とこの御本社（現三神合祭殿の御深秘）および鏡ヶ池は地中で繋がっているという伝説と関係があるのか。なお、神殿（本殿）床下の御深秘といえは、伊勢神宮のことが浮かびますので《歴史&宗教 No028》に別記する。

(end)